

列車を降りると夕方、小雨がぱらついていた。ニューヨークをでたときには快晴だったのに——。傘を持っていない土門恵理加は一瞬眉をひそめたが、荷物は小さいし、たいした降りではないのだからと、気を取り直してそのまま歩き始めた。グーグルマップによれば、ホテルまでは十五分程度の道のりのはずだ。ロードアイランド州プロヴィデンス。恵理加がここに来たのはクラムチャウダーのためだ。たかがスूपのためそんな遠出をするなんて酔狂だと、ニューヨークの友人たちにはゆうべさんざん呆れられた。「物好きにも程がある」とか、「ここにたくさんおいしいものがあるのに、何もそんな僻地に行かなくても」とか。僻地——。確かにそうかもしれないと恵理加は思う。ニューヨークとロードアイランドは地図で見ると近いのに、こうして実際に来てみると、随分遠い場所に来てしまったように感じる。列車運が悪く、三時間以上もかかったあげく、ここは雨で、八月だというのにTシャツ一枚では肌寒く、街は閑散としている。列車の窓から見た幾つもの駅名を、歩きながら恵理加は反芻した。ニューロシエルとかスタンフォードとか、ニューヘイヴンとかニューロンドンとか、ウエスタリーとかキングストンとか、線路上をただ通り過ぎただけの、知らない土地の名前を。

恵理加は父親の仕事の都合で、三歳から十七歳までニューヨークで暮した。日本に帰って高校を卒業したが、大学はまたニューヨークを選んだ。そこにボーイフレンドがい

たからだ。やがてその恋は終り、勉強に邁進する日々を経て大学を二つ卒業した恵理加は、本格的に帰国して、大学講師の職を得た。アメリカ文学と図書館学を教えている。今回の旅は夏休みを利用した、ひさしぶりの帰省だった。家族はとくに日本に帰っているのも帰省という言葉は正しくないかもしれないが、恵理加にとっては、すくなくとも感覚として、そうなのだった。

ホテルには迷わずに着いた。質素で機能的な中級ホテルだ。二泊するだけなので荷解きをするほどの荷物もなく、とりあえず雨に濡れた髪と身体を洗うべく、バスタブにお湯をためる。バスタブは古びているが清潔そうで、どうどうと音を立てて蛇口から迸る湯を眺めていると、旅先にいる自由がいきなり胸に湧きあがった。クラムチャウダーのあるレストランは、七時半に予約してある。

ロードアイランド州のクラムチャウダーについて恵理加がはじめて知ったのは、日本の雑誌の記事でだった。ポストンスタイルのミルクベースではなく、マンハッタンスタイルのトマトベースでもない、澄んだクラムチャウダーがロードアイランドにはあると書かれていた。いつだったか、たまたま乗った飛行機の座席ポケットにささっていた雑誌でその記事を目にして以来、いつかたべてみたいと思っていた。その後、好きな作家の一人であるドン・ウィンズロウの小説に、プロヴィデンススタイルと呼ばれるその澄

んだクラムチャウダーが印象的に描出されているのを読んで、これはもう行ってみるしかないと思ひ定めたのだ。ホームページと比較して質のよさそうなレストランを二軒選び、今夜とあしたの夜にそれぞれ予約をしてある。

バスタブに浸ったあと、着替えて軽く化粧をした。雨はもうあがっているようだが、窓から見る夜の街は全体に濡れていて、街灯の光が湿気にぼんやり滲んで見える。暗い雲の切れまに、満月まであと一息、という感じの月がでていた。

おもてにでると蒸し暑かった。雨といっしょに風も止んだせい、夕方よりあきらかに気温が高い。ほんの五分歩いただけで、エアコン対策のつもりで羽織ってきたブラウスが肌にはりつくのを感じた。静かな街だ。夕食どきなのに、ほとんど人とすれ違わない。一人旅の心細さか、友人たちのいるマンハッタンの喧噪が、にわか恋しくなる。

店までの道は、またしてもグーグルマップが頼りだった。街の中心部にでるにはまず橋を渡らなくてはならない。が、そこらじゅう橋だらけなので、恵理加には自分が正しい橋を正しい方向に渡っているのかどうかわからなかった。黒光りする水面を水鳥が泳いでいる。川の多い街だ。そういえばロードアイランド州の愛称はオーシャンステートで、それはナラガンセット湾が陸地の奥深くまで入組んでいるからだと聞いたことがあった。恵理加がほっとしたことに、レストランはかなり手前からそれとわかった。洒落た大

きな建物で、外側からライトアップされていたからだ。重いガラスドアをあけると店内は薄暗く、正面に階段型の水槽があって、魚貝とレモンのつめたい匂いがした。

案内されたのは窓際の席だった。ついに念願のクラムチャウダーがたべられるのだと思おうと胸が躍った。

「こんばんは。今夜このテーブルを担当するルークだ。何をのみたいかな？」

尋ねられ、「白ワインを」とこたえた恵理加は、そのウェイターの外見に一瞬たじろいだ。何かが異様だった。照明が暗いせいか肌が青白く、ミック・ジャガーなみに大きな口は、唇に色がない。いちばん奇妙なのは鼻で、ほとんどそこにはないかのように小さかった。まるで、大人の顔に赤ん坊の鼻をくっつけたかのようだ。くつきりとして形のいい目だけがいきいきと輝いている。

「リストを持ってこようか？ それとも料理に合わせてこちらで何本か見つくるって持ってきて、選んでもらうことにしようか？」

口調も奇妙だ。尊大で、若いのにどこか年配の男性じみている。

「ええと、じゃあ、あまり高価じゃなくて、おすすめのを」

恵理加が言うと、ウェイターはうれしそうにうなずき、ポンとロンのあいだの破裂音を舌で鳴らしてウインクをした。ラテン系なのかもしれない。とても小柄な男性だ。身

長一五五センチの恵理加とそう変らないように見える。白いシャツに黒いパンツという制服を着て、黒髪を一つに結んでいる。いきいきした目と愛想のいい接客にもかかわらず、ルック（胸につけた名札には、自己紹介通りそう書かれていた）にははじめから、どこか人を落着かなくさせるところがあった。熱意が過剰なせいかもしれないし、動きが性急なせいかもしれない。実際、彼はその両方だった。恵理加が注文を済ませたあとで（前菜にはもちろんクラムチャウダー、メインにはベビー・コールド・ロブスターというものを選んだ）、太刀魚をシンブルに Grill したものがどんなにおいしいか力説したり、自分ならまず絶対に牡蠣をたべると、訊いてもいないことを教えてくれたりしたり、そうかと思うと突然「アンディを呼んでこよう」と言っどどこかに行ってしまった（アンディというのが誰であれ、「いま忙しいようだ」という理由で現れなかった）、おすすめめの白ワインを二本運んで来たときも、「ちょっと待って」とか「もっといいのがあるかもしれない」とか言って、厨房とテーブルをせわしなく何往復もした。

ウェイターの拳動不審を別にすれば、それはまったくすばらしい食事だった。白ワインはぶどうの青味を残した味でつめたく冷えていたし、クラムチャウダーはほんとうに澄んでいて、大量の野菜とベーコンにもかかわらず、のみこむたびに喉も口のなかも貝の風味でいっぱいになった。恵理加はスープの写真を撮って、インスタグラムにアップ

した。ほとんどまを置かず、友人たちからハートやスマイルやコメントがつく。たべ終りたくない、と思うほどおいしいそれはスープだったが、たべているあいだじゅう、恵理加はルークの視線を感じていた。他のテーブルに仕事はないのだからかと心配になるくらい、彼はずっとそこにいた。恵理加のテーブルからすこし離れた階段の前に、ぽつんと。ときどき近づいてきては、「すべて問題ないかな」とか、「パンをもっといかがかな」とか訊いた。ワインを注ぎ足したり皿をさげたりウェイターのするべきことをして、それが終るとまた階段の前に立ち、恵理加を無遠慮に見つめる。目が合うと必ず笑みを浮かべるのだが、誘いとか性的なほめかしてないことは恵理加にもわかった。そういうものにはおろそかとしてぎこちないのだ。尊大な口調にもかかわらず、彼はむしろ不安そうに恵理加を見守っている。まるで、目を離したら恵理加がどこかに消えてしまふのではないかとおそれてでもいるみたいだ。

「味はよかったかな？」

ロブスターの残骸をさげに来たルークに尋ねられ、恵理加はとてもおいしかったことだ。ルークの顔がうれしそうにほころぶ。料理をほめられたときの笑みだけは本物に見える。店の味に誇りを持っているのだらう。

「ごちそうさまでした。お会計してください」

恵理加が言うのと、ルークの表情が歪ゆがんだ。失望？ それとも困惑だろうか。いずれにしても、彼はいきなり、

「きょうは新鮮ないちごがあるよ」

と言った。

「他にチョコレートケーキと、アイスクリーム、それにバーニング・アラスカも用意できる」

と。

べつなウェイターが階段をおりてきたのはそのときだった。長身瘦すく軀、整った顔立ちの白人で、ルークとおなじように髪をうしろで一つに結んでいるが、髪の色は黒ではなく茶色だった。

「ハイ、すべて問題ないですか？」

わずかに息を弾ませながら笑顔で言う。胸の名札にはアンディと書かれており、挙動不審なルークよりあきらかにまともそうだった。が、ほっとしたのもつかのまで、恵理加がぎよっとしたこと、ルークがアンディにしがみついていた。横から相手の胴体に両腕をまわし、顔を相手のあばら骨に押しつけるようにして。それは、恋人や友達というより子供が大人にするようなしがみつき方だった。こわいとか悲しいとか、たぶん助

けを求めるときに。

「こら、だめだろ」

きつい口調でアンデイが叱った。

「マーサががっかりするぞ」

叱られたルークは健気に笑みを浮かべ、「そうだった、マーサががっかりする」と眩つぶやくと、階段前の定位置に戻った。

「申し訳ない」

アンデイは恵理加に向き直って言った。

「あなたは日本人だよ。あいつがそう言うんだから間違いないと思うけど」

あいつ、というときにルークの方向に顎をしゃくった。

「二階の団体さんが帰るまで、もうちょっとだけ待っててくれる？　そうしたら全部説明するから」

恵理加には、何が何だかわからなかった。何を全部説明するのか、マーサとは誰なのか。が、アンデイはあわただしく二階に戻ってしまい、恵理加には今夜、ホテルに戻って寝る以外にすることもない。思いがけないなりゆきがおもしろかったので、とりあえず待ってみることにする。ルークとアンデイの関係に興味をそそられてもいた。

友人たちのインスタグラムをチェックしながら待っていると、三十分ほどでアンディが現れた。伝票と共に現れたので、カードで支払いをする。

「ルークは？」

姿が見えなかったので尋ねると、「シフトが終わったので帰った」という返事で、「大丈夫、チップはちゃんと彼のものになるから」とアンディはつけ足した。

煙草が喫たばこすいたかったので店の前のベンチで話すのもいいかと訊かれ、構わないと恵理加はこたえた。

「こっちには仕事で？」

ベンチにならんで腰をおろすと、アンディは質問から会話を始めた。

「友達に会いに来たの。ニューヨークに友達がいる」

恵理加はこたえ、プロヴィデンスにはクラムチャウダーを食べに来たのだと説明した。ニューヨークの友人たちとは違って、アンディはすこしも驚かなかった。「わざわざそのために？」とは言わなかったし、酔狂だともクレイジーだとも言わなかった。かわりに、さも当然だというふうにならずいて、

「多くの人がクラムチャウダーだと思っているあのミルクベースのスープを、ドン・ウインズロウは小説のなかで——」

と言いかけたので、

「赤ん坊のゲロ」

と恵理加は先まわりして言った。アンディは一瞬驚いた顔をしたが、そのあとみるみる相好を崩した。

「読んだの？」

と問われ、

「もちろん」

とこたえる。夏の夜気はしっとりしていて、そこらじゅうでカエルが鳴き立てていた。湿った街路樹の匂いがする。

「このことはあまり人に言ってほしくないんだけど」

アンディは言い、ポケットから煙草のパックをとりだした。

「ほら、ニューヨークの友達とかに」

「なぜ？　というか、何？」

恵理加は身構える。秘密だというなら、なぜただの観光客である自分に話してくれようとしているのかわからなかった。

「他言しないって約束してくれる？　ルークとその仲間たちのために」

「その仲間たち？」

訊き返したが、アンディはそれにはこたえず、黙って煙草に火をつける。返事を待っているらしい。

「わかった。約束する」

恵理加は言った。カエルの声を除くと、あたりはしんとしている。初対面の相手とこんなふうになんちにならんで腰掛けていることが、急に奇妙に思えた。その奇妙さは身軽さと紙一重で、恵理加はなんとなく愉たのしくなる。

「ルークは、このあたりで *boozes* とか *drifters* とか呼ばれてる連中の一人なんだ。気ままな奴やつらでね、みんな川のそばに住んでる。悪い奴らじゃないんだけど、彼らをよく思わない人間もいる。まあ、いろいろと不気味だしね」

確かに不気味だったと恵理加は思う。

「百年以上前からこのへんに定住していて、ルークは三世代目か四世代目になるのかな、だいぶ俺たちに同化してるけど、昔はいろいろトラブルがあったらしい。ばあちゃんに聞いたんだけどね」

「移民っていうこと？」

恵理加が尋ねると、

「まあ、それも言えるかな」

とアンディはこたえてひっそり笑った。

「だけど、そもそも奴らは人間じゃないからね」

人間じゃない？ どういう意味かわからなかった。

「野生動物。すくなくとも親父おやじはそう考えている。親父は奴らの研究者なんだ。素人だけど、資料や証言を収集してる。ルークはそもそも親父のかわいがっている booze でね、だから俺たちは兄弟みたいに育ったんだ」

「野生動物？」

「そう。ルークの祖先ははるばる日本から泳いで移住してきたんだ。すごいよね」

「日本から？」

「うん。日本では kappa って呼ばれてたらしいね。妖怪扱いされてたって聞いたよ」

可笑おかしそうにアンディは言った。

「無理もないと思うよ。あいつらは見かけが人間に近いし、喋しゃべるからね。恐怖だったんだらうね、昔の人には。親父が言うには、オウムの十数倍もの言語学習能力があるらしいよ」

恵理加には、にわかには信じられない。かっぱ？ どう考えていいのかわからなかった。

「Kappa って、川の子供っていう意味なんでしょう？ boozeとか drifter よりいい名前だよね」

アンディはそう言って微笑^{ほほえ}む。恵理加にわかったのは、ルークについて話すとき、アンディがとてもやさしい顔になる、ということだけだった。

「それで、ここからが本題なんだけど」

アンディは言い、煙草を地面に捨てて踏み消すと、

「日本は最近どうなの？」

と訊いた。

「はあ？」

思わず語気強く訊き返してしまふ。日本は最近どうなの、というのはい体どういう質問だろう。自分は今夜ワインをのみすぎたのかもしれない、という疑念がはじめて恵理加の胸に兆す。その疑念は、そのあとアンディの話を聞くにつれ、ますます深まっていた。店を外側からライトアップしていた電飾はいつのまにか消え、月と街灯の光だけが地上を照らしている。